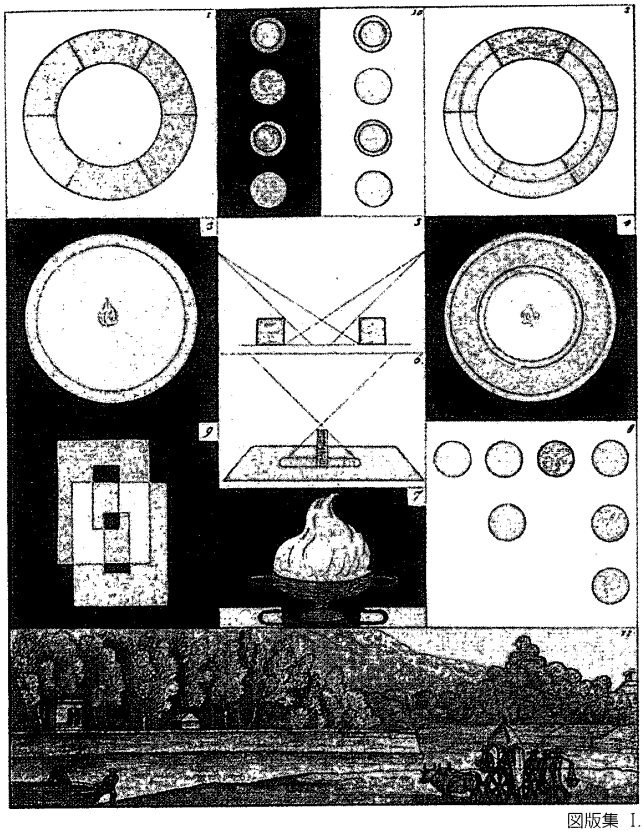
Color Science Association of Japan

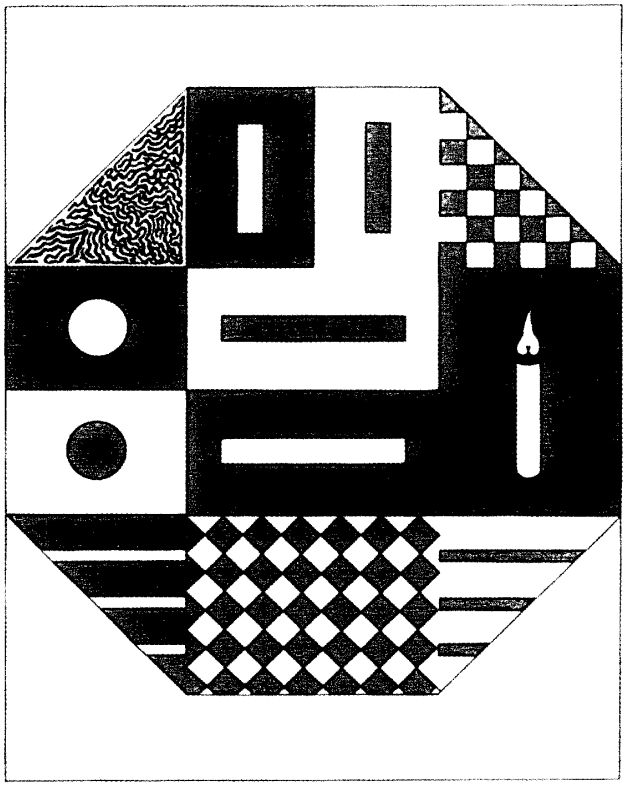


# ゲーテ著『色彩論』テュービンゲン(コッタ書店)、1810年

*Johann Wolfgang von Goethe, Zur Farbenlehre, Tübingen:J.G.Cottasche Buchhandlung, 1810.*



図版集 I.



図版集 IIa.

ゲーテ（1749-1832）の『色彩論』は1810年の刊行。内容は三部作として知られ、生理的色彩・物理的色彩・化学的色彩・心理的感性的色彩を体系的に論じる「教示篇」、ニュートンの著作『光学』を逐条的に分析・論破する「論争篇」、そして古典古代のピュタゴラスに始まり、ゲーテと同時代のロバート・ブレアの著作(1794)にいたるまで厖大な色彩研究史を詳細にあとづける「歴史篇」からなる。

ゲーテ色彩論の研究者は現時点では、まずミュンヘン版ほかのゲーテ全集を用いるが、最良の校訂と注釈はレオポルディーナ版『ゲーテ自然科学論集』をおいてほかにない。この全集のテクスト篇は、色彩論はじめ、植物学、動物学、地質学、気象学などゲーテの自然科学研究を網羅する11巻からなり、色彩論・光学関連の著作・論考だけでも5巻に及ぶ。ゲーテの科学論の理解は、この全集から始まる。

『色彩論』は上記したように三部作なのだが、その刊行時の構成は正確には、第一巻に「教示篇」と「論争篇」を、第二巻に「歴史篇」を収め、そして大きめの四つ折り判による「図版集」を加えた三冊本であった。きわめて重要な点は、ゲーテが図版集を独立した一冊として出版した事実だ（日本では工作舎が世界で唯一の同形式完訳版を1999年に刊行）。

図版集を独立させた意味は、読者にこの図版上で実際に色彩の「見え方」を体験させるためである。ゲーテは初期の著作『光学論考』ではカード図版を添付さえしており、法則の合理性を重視する近代科学に対して、感性的経験や実践性を重視する「科学者ゲーテ」の姿勢がよくうかがえよう。

図IIa はプリズムでこの図をみると、白と黒との境界に色彩が生じる。その見え方を説明しつつ、ゲーテはふと、別種な見え方についても注意を喚起する——図左の黒地の白い丸と、白地の黒い丸では大きさが違って見えるものだ、と。ゲーテはまさに、知覚心理学、視覚科学、認知科学の開拓者にほかならない。

前田富士男（慶應義塾大学）

NII-Electronic Library Service